

# 令和2年度「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」の選考に携わって

---

「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」選考委員会委員長

萩原 なつ子

令和2年度の「未来をつくる若者・オブ・ザ・イヤー」の選考では、子供・若者が地域や社会の輝く未来に向けて行った社会貢献活動において、顕著な功績があった個人及び団体として都道府県から推薦のあった26件の中から2件を内閣総理大臣表彰、7件を内閣府特命担当大臣表彰として表彰しました。

今年度、内閣総理大臣表彰を受賞した2件は両方とも高校生個人による活動でした。1人は災害時の通信手段としての鳩に注目し、大変独創的な研究を行い、社会的な課題に取り組んでおられます。もう1人は、コロナ禍の中、生まれ育った地域のために、地域の飲食店のテイクアウトや物品情報などをSNSにより発信することで、地域の活性化に貢献されました。

内閣府特命担当大臣表彰の7件については、高校から大学までのサークル活動を通じた社会貢献活動や個人・団体による地域活性化のための活動などでした。今回は全体として、コロナ禍という制約下においても、若者らしい工夫を凝らした活動が多かったと思います。

英国の経営学者であるチャールズ・ハンディは、4つのワークを提唱しています。4つのワークとは家事、育児、介護等のHome Work(家庭ワーク)、雇用労働、自営業、兼業、副業などのJob Work(有給ワーク)、学びを行うStudy Work(学習ワーク)、ボランティア、地域活動などの社会的活動を意味するGift Work(ギフトワーク)を意味し、バランスのとれた生活はこの4つのワークをどうブレンドするかで決まるとしています。日本社会においては、どうしても最後のGift Workが後回しにされがちですが、今回受賞された若者の活動は、若い世代においてGift Workが根付いてきている証ではないでしょうか。

現在、私たちはコロナ禍の脅威に直面しています。感染を防止するため様々な社会経済活動に制約が加えられています。そのことは、社会全体に様々なマイナスの影響を及ぼしていますが、今回受賞した若者の活動を見ていると、明るく躍動感に満ちた社会がそこまで来ていると感じられ、希望を持ってました。

本事例集では、内閣総理大臣表彰及び内閣府特命担当大臣表彰の受賞者の活動内容を紹介しておりますので、地域で社会貢献活動に取り組まれている若者、その支援者をはじめ多くの方々に御覧いただき、各地域における活動の発展にお役立ていただけることを願っております。